
世界最強墮天使伝説!!

一健一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界最強堕天使伝説！！

【著者名】

一健

NZ8320C

【あらすじ】

東京に暮らす一般人、、、とはちょっと違うところもあるけど、まあ普通に暮らしている俺は、いきなりとんでもないことに巻き込まれてしまつ

第一話 選ばれたのは俺！？

「」は、大都市東京

経済の中心地であり華やかなイメージがあるが、それゆえに人が集まり、今では犯罪が多い県ナンバーワンを独走体制だ。

まったく、いつから東京はこんな危ないとことになっちゃったんだか、

そんなことを考えている俺は今、
チンピラ三人と格闘中である

「なにボーッとしてやがんだよ、コルアアアー！」

飛んできたこぶしを少し屈んでかわし、その腕をつかみ、相手に背を向け、一気に相手の腕を下に引く

背負い投げだ。

下はコンクリなので、追撃はいらないだろ？

「いい気になつてんじゃねえぞおーー！」

次は右側面からこぶしが飛んできた。

同じように投げてもよかつたが、始めに倒した奴の方、つまり正面からもう一人が向かつてきていたので、側面から来たこぶしを顔を少し後ろに上げてよけ、体を右側面に90度回転させ、右足で相手わき腹を蹴り、相手の体を先ほど正面だった方向に飛ばした。

正面から来た奴の腹に蹴った奴がヒット

「ぐほあーーー！」

この間大体4秒弱

「く、くわう」

「覚えてやがれ！！」

刑事ドラマかなんかのように捨て台詞を残して、チンピラ二人組は暗闇に消えていった。

「ふう」

俺は、その場に倒れている女性に声をかけた。

「大丈夫ですか？」

「は、はい」

「そうですか、よかつた。」

「あ、ありがとうございます。」

「いえいえ、そんなたいそうな事はしていませんよ。」

「このあたりは、あんな奴が多いですから、気をつけてくださいね

そう、俺はこの街で人助けをしているのだ。

別に誰かに頼まれてしているわけではない、この力を生かせる方法が、こんな物しかなかつたからだ。

格闘技もやつていたが、どうもルールに則つてするところのがしょくに合わなかつた。

そもそも、なぜ俺がこんな力をつけてしまつたかと言ひと、俺の産まれ育つた場所が、人里はなれた山奥なんてレベルの場所ではなく、半径100kmは原生林で、一般人が一日と生きていられないような、相当危険な場所だったからである。

野生の熊にあつなんて、日常茶飯事だった。

まあ、あつた熊は親父が素手で殴り倒していただが……。

さすがに、俺もそんな生死をかけた生活は嫌になり、この東京に出てきたのはちょうど4年前だ。

俺はその後、帰路に着いた。

そこから、歩いて帰れる位置に、俺の借りているアパートはある。

途中まで何事も無かつたのだが、川原の上を通る線路の下で激しい頭痛とめまいが襲つてきて、そのまま倒れてしまつた。

「俺が覚えてるのはこれぐらいか」

「そつかー、じゃあなんで死んじゃつたかは分からんんだね」とだな

「まあ、『』が死後の世界だと仮定した上で話しだとそう言つた」とだな

「あー、まだ疑ってるのー?」ここは死後の世界だつてばあ、もし違うとしたら、その背中のをなんて説明するの?」

「確かに、目覚めた場所は草原で、背中に羽根までついてたら、信
用するしかねえよなあ」

「そーそー」

話の通り俺は死んでしまったらしい、激しい頭痛が直接死の原因で
はないということまでは分かった。

ちなみに、俺と話していたのはリーチェという名前の天使だそうだ。
そういうえば、まだ俺の名前も言つていなかつたな、俺は、ダイス・
リー・クラウドだ。

「それにしても、金髪の人が来たのは、初めてだなー」

「そうなのか?」

「うん、だつて私日本人担当だもん」

「俺は、母親がヨーロッパ系の人だからな」

「へー」

しかし、このリーチェとか言つ天使は、まるで天使という感じがし
ない、羽根が無かつたら、何処にでも居る普通の女の子だろつ

「何で死んだかの話に戻るんだけどさあ」

「ああ」

「たぶんだけど、『デスブラッド』にやられちゃったんじゃないのかなー、と思うわけよ」

「なんだよ、それ」

「えっとねえ、これを説明するにはすこーし長くなるんだけどいい？」

「いいよ、どうせやる」ともないしな

リーチェはくすっと微笑をもらした。

それは、まさに天使の微笑みと呼ぶべきものだわ!と思つた。

「えっとねえ、まず、この世界は三つの世界でできるの、一つは人界、一つは天界、一つは魔界、人界はそのまま、人が住んでる場所、天界は、ここ、つまり天使の世界、魔界は、悪魔が住む世界なの。」

「そして、人界に住む物が死んでしまつた時、例外なく天界にくるの、そして、この世界の天使が、なんらかの原因で死んでしまつた場合、魔界に言って悪魔となるの」

「でも、ここでやつかいになつてくるのが、天使に寿命がないことなの、天使に寿命がないということは、そのままほうつておいたら悪魔は一向に仲間が増えないでしょ、そして悪魔が作った対天使用のウイルスの名前が『デスブラッド』なの。」

「ふむ、でもさ、俺はそのウイルスにかかつて死んだんだろ、それは天使専用なんじやないのか?」

「これは、未確認情報だから詳しく述べる事はないんだけど、人界の物でも、ある一部の物はデスブラッドにかかるてしまうの」

「その物つてのはなんだ？」

「天使の歴史書によると、その物は必ず・・・・・魔王になつてゐる、」

「・・・はあ？」

さすがに予想外だった。

まだ、どこかへ飛ばされてしまつ、とか、悪魔に毎日狙われる、とか、悪魔の薬で天界に来た奴だ！！とか言って毎日死ぬほどつらい労働をさせられる、とかならまだ予想できたが、魔王になるう？

「で、でもよ、じゃあなんで俺はここにいるんだ？そんなのだったら俺はこっちに着いてすぐ悪魔に狙われておかしくないんじやないか？」

「そう、それもおかしいことの一つなの、デスブラッドで死んだ人界の物は、私みたいな案内役の天使が着く前に絶対デスブラッドを発症した、死体で見つかってたから、」

「・・・・・」

「・・・・・」

「なあ、天使側としては、俺が悪魔側に渡ることを恐れているんだよな」

「うん、そうだよ、」

「その、デスブラッドがこの天界全土に散布されることはないのか？」

「うん、デスブラッドは、魔王の血から生成されるって聞いたことがあるよ」

「なるほど、魔王も元人間、そんなに大量には作れないってことか」「・・・よし、決めた。俺天使側につくよ、」

「ホント！？ よかったー。」

「つーわけで、これからよろしくな、リーチュ」

俺はリーチュに向かつて手を差し伸べた。

リーチュは一瞬キヨトンとしていたが、すぐに満面の笑みをつかべ、

「うんー。」

と、強く答え、俺の手を握った。

こんな感じで、俺の天界大冒険は始まったわけだが、
大変なのはまだまだこれからだということを

俺はまだ

知るよしも

なかつた。

第一話 片翼の天使

俺たちはまず人界を覗くことができる、深淵湖という名の湖に来ていた。

人界が覗ける、イメージとしては湖がそのままかいＴＶ画面になつた感じだ。

「ダイスつてどいで死んだんだっけ？」

「えっと、川原だったから 川の 橋付近だな」

「おっけー」

リーチュはそう言つと、空中に光で文字を書き、それを湖に沈めた。

湖に波紋が起ると、その波紋が徐々に形を作り上げていく

「あ、俺だ」

「あれ、でもここ川原じゃないね」

リーチュの言うとおり、俺が寝ている場所は川原ではなく、小さな小屋の中だった。

そして周りには6人ほどの人がいた。

「見覚えがあるな、多分俺が住んでた場所から少し山を降りたところの農村だと思つ」

「ふーん」

「あ、親父・・・」

親父は今まで俺に一度も見せたことのない涙を、ためどなく流していた。

「親父・・・」

「リーチュ、行こう

「いいの?」

「ああ、どうせ置いてきた過去だ。」

それから俺たちは街に向かった。

街までは結構な距離があり、普通に行けば2日はかかるやつだ。

しばらく飛んだ後、日が傾いてきたため、草原で野宿することになつた。

「そうだ、ダイス、今、街にすごい人が来てるんだよ。」

「へー、どんな人？」

「うん、その人は神父さんなんだけどね、なんと、なんでも願いを叶えてくれるの」

「す」「いな、まるでRPGみたいだ。」

「でしょー」

ん？なんでも願いを叶えてもらえる・・・？

「なあ、リーチュ、その人本当になんでも叶えてくれるのか？」

「そうだよー、なんでも叶えてくれるよー」

「俺が、悪魔の手に落ちちゃだめなんだよな、」

「そうだよ」

「そして、俺が悪魔になっちゃつ条件は、あのナンチャラつていう病にかかるつまうことだよなあ」

「さうだけど・・・ダイス、どうかしたの？」

「・・・」れだ

「あのー・・ダイス?」

「リーチュー、俺を今すぐ元の神父のところに連れて行け!」

「え? ちよつと、ダイス、ビリしたの」

「そうだよ、俺が生き返れば万事OKじゃないか!」

「えー? た、確かにそうだけど、そ、そんなに慌てなくてもいいんじゃない? 一日後には着くんだし」

「一日後じゃ遅いんだ! たしか、俺が運ばれた村のしきたりで、死者が出たときに33時間後に火葬をするって言つ決まりがあるんだ!」

「ええー? でも、ここからじゃ、ほとんど無理だよ、つってダイス! ? ビリー?」

リーチューが空を見上げると、そこには全速力で街へ向かつて飛ぶダイスの姿があつた。

「もう、人の話聞かないんだから

24時間後

街の中を低空飛行で駆け抜けるダイスの姿があった。

「くわ〜、神父つてのはさじここんだよお、リーチェに聞いとけばよかつたぜ」

人に聞こえても、すでに日は落ち、街には人影はなかつた。

「何をお探しかな? ジョントルマン」

裏路地に入らうとしたダイスを引き止める声がかかった。

「そんなに急いでも探し物は見つかりませんよ、ダイス君」

「・・・何者だお前、なんで俺の名前を知つている

「怪しいものではないよ」

そつぱうと、暗がりから街灯の下に男が現れた。

その男は、身長一八〇cmほどで、すらりとした体格で、長めの黒

髪を持ち、黒いマントをはおつ、けつこうう美形で、マントの下には
スクール水

着（女子用）を着た変態だつた。

「・・・怪しい」

「失敬な！私のどこが怪しことこうのだね、それとも何か、私が
なにか犯罪チックな」とでもしてこるよつに見えるのかい？」

「見える」

「失敬なアゲイン！――」

「いや、落ち着くのだ私！今はこのよつなことをしている暇はない

「ダイス君、探している人は、ここから東に真つ直ぐ行つたところ
にある塔の中に居る」

「早く行きたまえ、制限時間はもう2時間を切つていゐぞ――」

「え？あ、は、はい、ありがとうございます！」

「あの、あなたは何者なんですか？」

「そうだな、賭けに負けでチップを失い、かわりに歳を重ねている、
ただの負け犬さ」

「さあ、早く行きたまえ――！」

「はい――」

ダイスは、全速で空へと飛んでいった。

「・・・君とは、また会つことになるだら」

「あーあつた、あの塔か」

ダイスの飛ぶ先には、かなり大きな塔が建っていた。

ここまでくるのに30分も使ってしまった、時間はあまり残されていない

塔の扉を乱暴に開くと、月の明かりで白く染まった教会があらわれた。

「どなたですかな?」んな夜更けに

「あなたが、神父か?」

ダイスの前に姿を現したのは、ダイスと同じくらいの年齢にみえる少年だった。

「ええ、いかにも」

「願いを叶えてくれるって呪つのは」

「本当です。」

「さつそくだが、頼む、急ぎの用なんだ」

「俺を生き返らせててくれ」

「・・・本当に、願いはそれでいいのですか?」

「ああ、かまわない、今しかチャンスは無いんだ」

「わかりました」

そう言つと、神父は手に持つていた杖を高く掲げ、よく言つあたりの呪文を唱えた。

呪文を唱え終わるまで、杖には光の玉が、何処からか集まり、そして大きな光の玉となつていつた。

「田を闇じてください!」

そういう終わるか終わらないかのところで、杖から強烈な光が放たれた。

そいやあ、こんなのもよくあるパターンだよな、
光があさまると、俺は人界にいるわけだ。
これで、めでたしめでたし、ハッピーエンドだ。

光がおさまり、周りが暗くなる

ゆうべつと目を開けると、

いい笑顔の神父が、目の前に立っていた。

「…………生き返つてないぞ」

「やのとうですね」

「どうこういじだよ、願いは何でも叶つんじやないのかよ」

「いえ、確かにあなたの願いは叶えられましたよ」

「じゃあ、なんで……」

「願いを叶えるためには条件が必要なのです。それは・・・

「それは?」

「悪魔になる」とですか

「・・・・・はあ?」

「え、ちょっと待ってくださいよ、でも俺なんにも変わらないじゃないですか」

「いえ、変わっていますよ」

神父は俺の羽根を指差していた。

「な、なんだこれ・・・・」

俺の右羽根は真っ黒に染まっていた。

「どうやら、中途半端に悪魔になってしまったようですね」

「なんでだよ、悪魔になるつてことは死ぬつてことだら、じゃあ俺の生き返るつていう願いと死ぬつてことでイコールのじゃねえか、」

「計算上はそうなりますが、この儀式は願いと、条件が同時に発生するのです。つまり、死ながら生き返らなければならぬ、」

「……………井じかよ」

「おーい、ダイスー」

「この声は、リーチュだ……」

「おおお、かつこじい」

「お前な……」

「すゞーい、羽根が片方真っ黒だー」

「お前な！俺は、半分悪魔になつちまつたんだぞ！！」

「ええ！？ そつなの！？」

「ああ、願いを叶えるためには、悪魔にならないといけないっていう条件があつたらしい、というか、なんで初めに言わなかつたんだよ」

「お聞きにならなかつたものですから、てっきり知つているものだと思つていましたよ」

「……………そつか、そつなんだ、」

「でも、

「ダイスはダイスだよ。」

「そうだな・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8320c/>

世界最強堕天使伝説!!

2010年10月19日03時26分発行